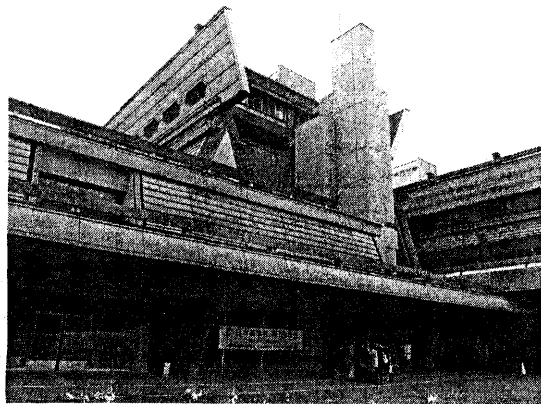


日本薬学会第129年会

国立京都国際会館などで開催

日本薬学会第129年会が3月26日(木)～28日(土)に国立京都国際会館、グランドプリンスホテル京都で開催された。年会では会頭講演、受賞講演21題、特別講演25題、特別シンポジウム2題、スポンサードシンポジウム2題、一般シンポジウム43題、大学院生シンポジウム6題、ランチオンセミナー18題、新技術・製品セミナー、各種展示が行われたほか、化学系、物理系、生物系、環境・衛生系、医療系、その他において一般口頭発表、一般ポスター発表が行われた。



国立京都国際会館

医療系に関するポスター発表の中で濃沼政美氏らによって、薬剤師による点滴静注やTDM時の採血等の行為に対する現職病院薬剤師の賛否の理由が明らかにされた。ポスターのタイトルは「多様化する医療ニーズを反映した新たな病院薬剤師業務の方向性3―薬剤師による点滴静注やTDM時の採血に対する賛否及び潜在意識の探索」、演題番号は26P―pm61、日本大学薬学部の濃沼政美氏、今井由恵氏、神田愛美氏、小池勝也氏、中村 均氏、菊名記念病院薬剤師部の佐藤 透氏らによる発表。

一昨年、日病薬名簿1ページあたり1名を無作為に抽出し、合計476名に対し無記名アンケート調査を行った。調査はバイタルサイン測定やTDM時の採血など新たな業務展開に関連したもので、その結果、約4割の回答者が「新たな業務展開が薬剤師の将来展望を明るくする」と答えた。この傾向は所属施設属性、勤務歴、担当部署などに関連があることもわかった。新たな業務が現実となった際に、社会や医療にいかなる影響が生じると考えるか、その影響項目と回答者の新たな業

務への賛否との因果関係を調査した。設問内容は①点滴静注や外用剤塗布などの薬剤に関連する医療行為が薬剤師に求められることは望ましいことか? ②点滴静注や外用剤塗布などの薬剤に関連する医療行為が認められた際、現行の制度と比較してどのような影響が生じると予測するか? ③においては薬物療法の質・安全性・効率性、病院薬剤師の専門性、責任、資質、研究活動などの23項目で回答、それをもとに回答者意識の測定を行った。

①については賛否の比率はほぼ等しく、現職薬剤師の意見が二分されていることがわかった。②の回答結果は新しい業務の現実化をポジティブに捉えていることが伺えるものであった。③では就労条件という項目で、影響は低いあるいはマイナスであるという回答であったことから、賛成する要因は薬剤師自身の質や雇用の向上のためというより、医療・社会の期待にこたえるため、薬物療法の質を向上させるためであることが明らかになり、現職病院薬剤師は新たな業務に対して、大きな視野で考えていることが伺えた。

また医療系では28日に特別講演21「薬剤師は医療にどのように貢献するか」(堀内龍也氏・日本病院薬剤師会会長)が行われたほか、シンポジウム31「激変する医療環境と薬剤業務の革新」、シンポジウム35「臨床セ恩斯が

要求される救急医療薬学」、シンポジウム38「薬剤師の未来像」が行われた。▽シンポ31・オーガナイザーは北田光一氏(千葉大病院) 林 昌洋氏(虎の門病院) ①医療環境の変化と薬剤師に期待する役割(磯部総一郎氏・厚生省保険局) ②顔の見える薬剤師(中小病院での業務革新(甲斐純子氏・蘇生会総合病院) ③スキルミックス医療における薬剤師実務と臨床薬学研究(林氏) ④今、大病院薬剤師部に求められるもの(乾 賢一氏・京大病院) ▽シンポ35・オーガナイザーは大井一弥氏(鈴鹿医療大)・高村徳人氏(九州保健福祉大) ①救急医療と災害医療における薬剤師の関与(合澤啓二氏・熊本赤十字病院) ②CPR(心肺蘇生)現場における薬剤師の役割(瓦比呂子氏・第二岡本総合病院) ③クラッシュシンドロームの治療法確立に関する基礎的研究(村田 勇氏・城西大) ④薬学生の臨床能力向上を目指した救急救命実習(高村氏) ⑤救急医療における薬剤師の可能性(武田多一氏・三重大学) ▽シンポ38・オーガナイザーは山本信夫氏(保生堂薬局)・土屋文人氏(東京医科歯科大病院) ①基調講演・薬剤師の将来ビジョンについて(児玉 孝氏・日本薬剤師会) ②国民が薬剤師に求めるもの(関野秀人氏・厚生省医薬食品局) ③社会は薬剤師に何を求めているのか(望月眞弓氏・慶應義塾大)